



わかさぎ

第
125
号
2009

平成21年10月発行



INDEX

- 02 わかさぎ時評11
133年間の歴史を活かして
未来へ生き続ける教育へ
04 平成21年度地域活動支援事業
・多気町青少年育成町民会議の取り組み
・大紀町青少年育成町民会議の取り組み

- 06 第31回「少年の主張三重県大会」
～中学生のメッセージ2009～報告
最優秀賞「笑顔の向こうに」
08 第33回全国高等学校総合
文化祭が終わって
編集後記

〈編集発行〉 _____
(財)三重こどもわかもの育成財団
〒515-0054 三重県松阪市立野町1291
中部台運動公園内
TEL : 0598-22-4911
FAX : 0598-23-7792
URL : <http://www.mie-cc.or.jp>



133年間の歴史を活かして未来へ生き続ける教育へ

亀山市立白川小学校

(小規模特認校制度・国登録有形文化財)

西南戦争の前年、1876年（明治9年）に創立された白木村の「白木学校」は歴史的な転換期を経験しながら、教育の使命を133年間担ってきた歴史があります。創立の翌年には「白木簡易科授業所」となり、2009年の現在までに村の合併や町村制施行に伴い「白川尋常小学校」「白川尋常高等小学校」「白川国民学校」、1955（昭和30年）年に白川村は亀山市との合併で、「亀山市立白川小学校」と改称されて現在に至っています。2005年には小規模特認校制度（校区を越えて入・転学できる特別に認められた学校）の本格実施が始まりました。野呂校長先生、前コミュニティセンター会長打田さん及び亀山市役所の嶋村さんからお話を伺いました。



白川小学校（昭和29年建設）

Q：小規模特認校制度を利用している生徒は何人でしょうか？

校長：亀山市在住の児童ならここへ入学できるという制度で、現在は10人が利用しています。全校生徒は43人です。

小規模特認校制度は、2年間の試行期間後、平成17年から本格実施です。学校の全体の雰囲気は変わりますね。特に学校が意識するというより、白川小学校は地域の人たちが学校を支え、地域と学校が一緒に子ども達を教育してきた歴史がありますので、児童の保護者にも人間関係が繋がるようになります。PTAの仕事とか、子ども会活動などにも参加してもらうことにもなります。

白川の子ども達が他所から来た子どもを受け入れているのは、それぞれの立場の人との接し方が自然と身についていて、いろんな子の立場をお互いに受入れるっていう、そういう素地があるような気がします。特認校へ来ている子は、ずっと亀山に住んであって、という子は少ないです。もう転校しましたが外国籍の子など多様です。学校全体では、外から来た子だからという雰囲気はないですね。地域に在る学校という考え方で、総合学習とのタイアップです。例えば、3・4年の総合学習の一つは『そばを作る』で、地域の方達に協力いただいています。

打田さん：昔から白川では蕎麦を自家生産していたという経緯があるんです。スーパーで買うと「あれ違うな」ということから地区の行事に入れられないかなということから、子どもも一緒に蕎麦の実を畑に蒔いて収穫して製粉して、大雨で種が流れて少なかった時も…。蕎麦を作って、お年寄りの人や祭りでも皆に食べてもらう、そういうことに子どもが関わります。学校の先生達も熱心です。

白川小学校は200人位子どもがいた頃からうちの村の小学校ということで、いつも学校と地域はほとんど一緒に活動しています。土・日曜日の行事へ先生の参加もあります。

校長：運動会は地域と小学校と一緒に開催です。学校とコミュニティの担当の人が打ち合わせをします。地区的運動会の部分と学校の運動会の部分と一緒にあります。盛り上がりますよ。学校半分、地域半分ですわ。

◆◆◆ 国登録有形文化財に指定された校舎で学ぶ元気な児童 ◆◆◆

Q：白川小学校は山の上に位置してますね、生徒の登下校はどのようにになっているのでしょうか？

校長：校区は白木地区と小川地区で、それぞれの地区で集合して集団登校です。それぞれの集合場所から学校へは上り坂の山道で900mあります。遠い子だと家から学校まで40分位かかります。下校は保護者が迎えに来ることもあり、特認校制度で来ている生徒の保護者は迎えに来た時に、白木地区と小川地区の保護者との交流が進むようです。

学校の奉仕作業には両親で参加してくれます。夏の奉仕作業には卒業生の中学生も来てくれました。

Q：白川小学校は国登録有形文化財に新登録されましたね。

校長：この学校がもし統廃合になったら、この白木の地区と小川の地区は多分ばらばらになるでしょう。地区的とらえ方というのは、学校を中心にまとまつておるという感じが強いですから、学校が無くなったらどうなるの？というそういう心配があるんです。

Q：学校があって、白木と小川が白川校区としての学びの場になる。

打田さん：感じとしてはそんな感じ。基本的には学校が位置的にも全ての面でも接着剤的なものになっている。だから文化財の指定を受けるときに、文化財の指定を受けたら、「もう学校は廃校にならへんの」というそんな感じの意見が多くかった。

Q：「文化財」という、ちょっと固定的なイメージの意見がでましたね。

校長：学校としては何とか、地域の思いを感じるところは残したい。建物は残るかもしれないけれど、学校として、子どもたちが集まる場所としてここを残さないと、地域としては廃れてしまう。

嶋村さん：今回文化財にしていただいたということは、学校としてただこのまま残るんじゃなくて、そこに何かの形で教育に活かせるようによりよきものに校舎自体もしていかなくてはなりません。建物を残しながら、公教育の環境をよりよくしていくところに、市としてどうやっていくか、文化財という一つの価値を足すことによって、市として何かが出来ていくという環境づくりの一つだと僕らは思っているんです。文化財にすることを一つのきっかけとしてより学校施設として充実したものになっていくように投資ができる環境づくりをしたという考えです。国指定の登録有形文化財で実際に校舎として使われているのは、本当に数校だけのようです。登録有形文化財という制度自体が、今までの文化財の制度ではないです。今までの文化財の保護の制度というのは、指定文化財というと、国の指定文化財は重要文化財になります。ところが登録有形文化財という制度は、使いながら残していくにはどうするかということを考える制度です。学校として現役で使いながらこの建物をいかに活かし、残すかということを考えるということで、登録有形文化財の制度を使おうとした、ということです。この学校自体は市の建物です。登録有形文化財の制度と言うのはそれに対する特別な支援策という補助制度はない、という制度です。白川小学校をずっと将来にわたって残していくという将来的な展望を示して、我々の財産としてのこの建物をどういうふうにこれからも皆ずっと共有するために知恵を出し合うのか。結局そこに尽くるわけですね。登録有形文化財という制度も全く新しい考え方で、平成8年に出来た制度です。しかし、現状の亀山市的人口は増えています。ある地域だけ人口がどんどん減ってくる中で、今回この小学校を文化財にしていただいたということは、文化財にすることを一つのきっかけとしてより、学校施設として充実したものになっていくように投資ができる環境づくりをした、という考えです。

学校として存続していくことの一つに、ただこのままでただ残るんじゃなくて、そこに何かの形で教育に活かせるように、学校の校舎ということだけでなく、文化財という一つの価値を足す為の環境づくりの一つだと亀山市は考えています。

さいごに

学校の存在は地域がまとまる要である故に、児童の数だけで統廃合の問題は解決しません。難しい！

(文責：中西智子)



成長した蕎麦の花の観察をする子どもたちの活動

多気町青少年育成町民会議の取り組み

■ 「自然体験セミナー」を行なうにあたって

実施日：平成21年7月28日（火）～29日（水）

場 所：国立曾爾青少年自然の家（奈良県）

豊かな心を育み、社会の一員として自立し、心身ともに健やかに成長することは、変わることのない継続的な地域社会の願いです。青少年を取り巻く今日的問題・課題等へ対応しつつ、町民ぐるみ、地域ぐるみで子どもたちを守り、安心して生活できる町づくりのため家庭・学校・地域社会と連携、協働し、青少年が心身ともに健やかに育つ「多気町」の実現に向けて私たちの町ではユニークな活動として「子どもをほめて育てる運動」を行っています。

今回は、子どもたちに豊かな体験を提供する「自然体験活動」として、奈良県の国立曾爾青少年自然の家にて「自然体験セミナー」を実施しました。

■ 自然体験活動

5月下旬、多気町内全ての小中学校（佐奈小・相可小・津田小・外城田小・勢和小・勢和中・多気中）へ参加募集を行い、事前説明会などを経て、当日は児童・生徒40名の参加がありました。

直径、約15cm・長さ、約1mの竹筒を使っての「竹飯」づくりは、天候には恵まれなかったが「青少年自然の家」の配慮により、野外炊飯場を変更し、また引率者のチームワークと子どもたちの積極的な活動もあり実現することができました。炊き上がるまでの時間を使って、それぞれの「マイ箸」を竹で作り、小さな手では持ちきれないほど太い竹箸から折れそうなくらいに細い竹箸まで様々に不揃いで個性的な箸が出来上がりました。

炊き上がった「竹筒味ご飯」は、楽しい会話とともにすべてなくなり、後片付けもしっかりと、ほうき、塵取り、布巾を手に「来たときよりも、美しく」を合言葉に、細かい竹くずも一本一本丁寧に摘み上げて掃除をしました。

■ 星空観察

星空観測は、小雨のため室内での講座（星座解説）になりましたが、7月22日に日本の各地でみられた日食は、子どもたちの住む多気町でも80%程が欠ける部分日食が観測されましたが、その影響もあり子どもたちの関心は高かったようです。

また、講師として来ていただいた人たちの解説は、星座早見盤を使って、「その日、その時刻」に見える星空の説明や24本骨の雨傘を利用して「北斗七星」と「カシオペア座」の関係を説明するというユニークなものでした。

最後に「今日の反省や、印象に残ったこと」などをノートにまとめて各自の部屋へ戻りました。

■ 曽爾高原ハイキング

天候の回復した2日目、太陽の光を受け、緑のじゅうたんを敷き詰めたような高原は、ただそれだけでみんなの心をワクワクさせたようです。このような自然の中での活動が事業の目的のひとつ「学校枠・年齢枠を超えての友好関係・人間関係を深める」として、私たちに環境を提供しているのでしょうか。子どもたちの顔が瞬く間に“いい笑顔”になっていきます。

多気町青少年育成町民会議としては、これからもこのような自然の中での活動を大事にしていきたいと考えています。



「自然体験セミナー」に参加した子どもたち



できあがった竹筒味ご飯

大紀町青少年育成町民会議の取り組み

■ 「ふれあい鮎つかみ大会」

実施日：平成21年8月23日（日）

場 所：度会郡大紀町永会木屋地区（藤川上流）

当町恒例の「ふれあい鮎つかみ大会」を開催いたしました。

大紀町青少年育成町民会議では年間「非行防止」をテーマとしたパトロールを2回、「ふれあい・交流・健全育成」をテーマとしたイベント行事を3～4回実施しておりますが、ふれあい鮎つかみ大会は、大紀町の子どもなら誰もが知る人気の主要行事で、町村合併（大宮町・紀勢町・大内山村）後今回で3回目を迎えました。3回目といいましても旧大宮町時代では昔からつづく恒例行事で実質10回以上行っている行事です。

この大会は、自然の川に放流した鮎を「手づかみと伝統漁法の“しゃくり”」で捕獲しますが、河原・岩場の痛さや歩きにくさ、水の冷たさなども含め夢中になれる楽しさや満足感をとおして何かを感じてもらえたと思います。自然の川の中で、生きている魚を何とか捕まえ、その鮎を炭焼きにして食します。実際に調理し食することで、「いのちを感じること」によって健全育成を促すことが目的の行事です。

当日、約200名の参加者が川ではしゃぐ中、先端に針のついた竿をもって夢中で鮎を追いかける“しゃくり”は、かなりハラハラで不安でしたがなんとか無事終えることができました。一昔前の自然のある町や村では、誰もが子どものときに体験した当たり前の遊びですが、夢中で鮎を追いかける一生懸命な顔や、保護者や友人だけでなく、全く知らない子どもも助け合って追いかけている姿や、鮎を捕まえたときのなんとも言えないすがすがしい満足げな笑顔が何よりの成果だと思いました。

当町民会議としましても不思議なもので「子どもの笑顔や夢中で一生懸命な顔」を見ていると何がどうとか細かいことは分かりませんが、確実に健全育成にはつながっているということが実感でき、今の子どもも、ゲームも楽しいけど自然の中で目一杯遊びたいという気持ちがとてもあり、今も昔も子どもは変わらないということがわかり、よし、次またがんばろうという気持ちになりました。

また、保護者も家の中では見られない子どもの姿を通して気付くところが多くかったというご意見もいただき、スタッフも子どもも保護者もとても充実した一日となったと思います。

苦労したところは、やはり子ども達の安全面で「どんなに良い行事でも一人でも怪我人がでれば失敗」という意見もあり、また真夏の暑く日差しの強い時期ということで「熱中症・怪我」には大変注意いたしました。熱中症対策として、暑く日差しのきつい時間に「デザートタイム」をもうけました。これには水分補給・体温調整を考え「カキ氷」を出そうということになり、どうせ出すなら地元の名産品も味わってもらおうという意見があり「大内山酪農アイス」をカキ氷にトッピングし特製デザートとしてふるまい、万全の体制で臨みました。特製デザートはすごく好評で、おかげが続出しました。最後に環境美化ということでゴミ拾いを行いましたが、普段はいやなゴミ拾いも、とても楽しそうに行っていました。

最後に大紀町青少年育成町民会議では今後も、考えれば考えるほど難しい「健全育成」をテーマに子ども・青少年の現状にあった活動を実施していくので何かの縁で関わる場合がございましたらご協力・応援をよろしくお願ひ申しあげます。



藤川上流での鮎つかみ大会の様子



伝統の「しゃくり漁法」による
鮎の捕獲に成功した子ども

第31回「少年の主張三重県大会」 ～中学生のメッセージ2009～報告

平成21年8月22日（土）、津リージョンプラザにおいて、第31回「少年の主張三重県大会」～中学生のメッセージ2009～が開催されました。本年は県内63校から9,993名の応募があり、選ばれた14名が本大会で自らの主張を発表しました。

本大会では、津市立橋北中学校生・津市立東橋内中学校生・津市立西橋内中学校生による運営協力や津市立橋南中学校吹奏楽部による演奏会など、中学生自身による運営コラボレーションが実現し、大会は大いに盛りあがりました。

なお、平成22年度は、鈴鹿地区（鈴鹿市・亀山市）の市民会議の協力により、8月29日（日）、鈴鹿市文化会館で開催されます。

○審査結果発表○

賞	学校名	学年	名前	タイトル
最優秀賞	皇學館中学校	3年	なが 長　おか 岡　ゆ 由　り 莉	笑顔の向こうに
優秀賞 (順不同)	津市立南が丘中学校	3年	おお 大　さき 寄　まさ 雅　と 人	生きている喜び
	皇學館中学校	2年	こ 古　が 閑　あい 愛　こ 子	交流を通して
	津市立南が丘中学校	3年	の 野　ろ 呂　え り　な 絵理奈	スローフードの在り方
優良賞 (順不同)	名張市立赤目中学校	2年	にし 西　もり 森　ゆう 結　き 葵	いつでも味方でいるから
	尾鷲市立輪内中学校	2年	おお 大　かわ 川　な 菜　ほ 帆	文字での会話と心での会話
	鈴鹿市立鼓ヶ浦中学校	3年	まえ 前　ざわ 澤　とも 知　や 哉	スポーツの力
	紀北町立潮南中学校	3年	まえ 前　やま 山　ま な 奈	裁判員制度のある社会に向けて
	暁中学校	3年	い　とう 伊　藤　きょう 杏　香	メールと手紙
	紀北町立紀北中学校	3年	もり 森　かわ 川　かすみ 霞	裁判員制度について
	鳥羽市立鏡浦中学校	2年	はま 濱　ぐち 口　ま ゆ　な 真有奈	私達一人一人が小さなことから
	熊野市立有馬中学校	2年	とよ 豊　だ 田　ゆう 優　き 希	私の母
	セントヨゼフ女子学園中学校	3年	さく 櫻　らい 井　あや 彩　か 加	つながりから生まれる明るい社会
	亀山市立亀山中学校	3年	とよ 豊　だ 田　なつ 夏　み 美	今、私が伝えたいこと



津市立橋南中学校吹奏楽部の演奏会



発表者14名と運営協力中学校生の皆さん



最優秀賞

「笑顔の向こうに」

皇學館中学校 3年 長岡由莉さん

私は生まれつき病気を持っています。大血管転位症という心臓病です。生後十日で根治手術を受け、今は元気一杯ですが、完治したわけではなく、一生つき合っていくものだと聞かされています。しかし、私はこの病気を持って生まれた事を心の底から不幸だと思った事はありません。なぜなら、その事によって、まわりの人々の温かさ、大切さを知る事が出来ました。また、自分の生きがいになる紙芝居と出会えたからです。

大血管転位症とは、大動脈と肺動脈が逆についており、放っておくとよごれた血液が全身をめぐり、死に至る病気です。幸い、手術は成功し、今こうして元気にしていますが、退院時、母は医師から、「運動に興味を持たない様に育てなさい。」と言われたそうです。運動がダメなら音楽をと単純に思った母に連れられ通った音楽教室で、かわいいおばけのピーちゃんという絵本の主人公を知りました。そして、大好きなピーちゃんの作者まついのりこさんと出会ったのは小学二年の時です。絵本・紙芝居作家ののりこさんとの出会いから、紙芝居を演じる事の楽しさと、紙芝居は共感の感性を育てる大切な物だという事を知る事ができました。また、紙芝居を見てくれる子供たちの笑顔を見るのも本当に楽しみになりました。そんな子供たちを見ていると、「いつか、自分の子供が出来たら、たくさん演じたい。」と思うようになりましたが、心臓病である私に産めるかどうか不安になり、泣いてしまった事がありました。

そんな時、母が入会している「心臓を守る会」の会報に私と同じ病気の女性が子供を産んだという記事を見つけました。「ほら、医学は進歩してるのよ。」と言う母は笑顔でした。思えば母はいつも笑っています。小学生の頃、大きな胸の傷あとを気にすると、母は私をしっかり抱きながら「病気を持っていても由莉は由莉。一人で戦った傷あとは勲章だよ。」と笑顔で言いました。

この笑顔は、私の勇気になります。「それは、何？」と聞く友達に、「病気があって、手術をしたんさ。」と、しっかりと笑顔で伝える事が出来ます。すると、からかう事もなく、病気を理解し、助けてくれる友達が出来ました。

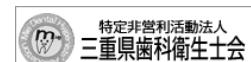
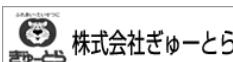
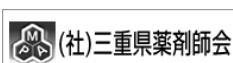
子供が、病気や障がいをもって生まれた事で、家族がこわれてしまったという人の話を聞いた事があります。こんな悲しい事はありません。前を向いて、明るく、笑顔を忘れなければ、色々なところに希望はあります。どうか、その事に気付いて下さい。

私は今とても幸せです。病気でもそんな私がいいと心から愛してくれる家族、病気の私を認め、普通に接してくれる友達。そんなまわりの人達がいてくれたからこそ、希望を持つ事が出来ました。

次は私が、私のように病気を持っている子供達、悲しさの中にいる子供達に希望を届ける番です。大切な好きな紙芝居で、楽しく平和な共感を育てながら、一人でも多くの子供達に、希望の光を届けていきたいと思っています。世界中の子供達が「幸せだ」と思えるようになる事を願って。

とびきりの笑顔と一緒に…。

第31回「少年の主張三重県大会」～中学生のメッセージ2009～協賛企業・団体（順不同）



第33回全国高等学校総合文化祭が終わって



編集部長：吉井 勇人さん

速報が命の「速報新聞」は
初めての経験でした



みえびい

全国高等学校総合文化祭が2009年7月29日～8月2日に三重県内で開催。県内外の高校生、中国、ラオス、ブラジル、韓国約3,051校19,096人が舞台にスタッフにと大活躍でした。総合文化祭のオープニングの様子を紹介する「速報新聞」担当の吉井編集部長からお話を伺いました。

Q：『速報新聞』の編集部長をされたそうですね。自己紹介をお願いします。

吉井：名張高等学校の3年、新聞部長の吉井勇人、18才です。速報新聞は四日市高校・津商業高校・津高校・名張高校の13人が合同で仕事を進めます。最初に、編集部長は「お前だろう」ということになって「僕っすか？」みたいな感じ。内心そんなに緊張していなかったんですけど、足がぶるぶるになっていましたよ。紙面の編集はここに記事でここに写真と、全部自分にかかるんです。名張高校の外で作るのは緊張感が違いました。伊勢サンアリーナで速報新聞を作ったんです。準備っていうか、速報新聞は速報性が大事で、全体の開会式みたいなものです。その開会式では八百万の神というか、色々な姿の神様が地上に降りてきて、総文祭を見るみたいな感じでプログラムがどんどん進んでいく。賑やかに進行していく様子を速報新聞で出したんです。それも開会式が終わったと同時に配れるように段取りしました。

Q：前もって写真とか用意しているのですか？

吉井：写真は本番の写真だけをはめるようにして、後はリハーサルの時に取材をして用意しました。リハーサルは監督の声っていうか、皆がピリピリしています。本番は球場並みの会場に観客は満席。皇室の方々も来てくださって、ボディーガードがいて、宮さんの周りだけちょっとだけ空間があった。こんなすごいイベントって普段見たことないので、速報新聞のスタッフに緊張感がありました。何を基準に記事を決めるのかどの記事を速報新聞に載せるかって言うのは、話し合います。形は基本的に前もって決めてあって、この記事は俺らが行くわ、みたいな感じで後は各校でまとめたのを割り付けていくってことです。普通にパンフレットを読むだけじゃ絶対にわからないようなことを聞いてきたり、演じる方の気持ちを大事にしました。

新聞を読む人の立場に立って、読者の人が何を知りたいのかって言う、そういう視点です。生々しさっていうか、人間性ですかね。人の声を聞くっていうのがいい新聞かなっていうことで下調べの準備もします。恥ずかしがったり緊張している人には冗談言ったりして、パンフレットに載っていないようなことを探して、練習のこともきました。普通の高校生が本番では完璧な天女で、スイッチの入れ替えでしょうかね。本番はミス無しで素晴らしいかったです。

Q：サンアリーナに用意された編集室ってどんな所ですか？

吉井：印刷機が4つ、パソコンも完備で、プロと同じものを使いました。4,000枚の速報新聞を大勢の人に配る時は「みんなの気持ちが一つの形になった」そんな実感でした。舞台が終わって速報新聞を読んだ人が「あれ、何で、さっき舞台見たのに、何なんこいつら」と感じました。速報性抜群が勝負なもので。他校の生徒と一緒につくるのは面白かったです。

◎ 新聞部の交流チームで「交流新聞」を作りました！

吉井：その後、7月30日・31日には津市のメッセウイングみえへ全国新聞部33都道府県119校の部員が集まって、都道府県を越えた44班のチーム毎に、三重県内の史跡や人気スポットへ取材に入りました。『交流新聞』の取材です。記事を書いて皆で評価しあいました。最後に次年度開催県から「次は宮崎県なのでよろしく」との挨拶と僕のお礼の挨拶で終了しました。

忙しい日が続いたようですが、色々と貴重な経験でしたね。ご苦労様でした。

(文責：中西智子)

編 集 後 記

読売新聞の朝刊（2009/8/29）によると、ベネッセコーポレーションが、小学5年生～高校2年生8,017人対象に調査した結果、6割の児童・生徒が「時間を無駄にしていると感じている」ことが判ったそうです。毎日忙しい子ども達なのでしょうが、時間の使い方へのアドバイスって難しいですね…。

『わかすぎ』編集長 中 西 智 子